

変革の時代「令和維新」

コロナで露呈、日本の限界

「ベースボール&スポーツクリニック」医師・馬見塚尚孝氏㊤

JML大会の目的は「野球を通じて医療従事者の心身を癒す」です。医療従事者がスポーツに親しむ意義とは何か。野球ひじをはじめ、スポーツ障害の診断・治療の第一人者で「ベースボール&スポーツクリニック」（川崎市）の整形外科医、馬見塚尚孝さんに2回にわたって聞きました。

——新型コロナウイルスのワクチン接種が進んでいますが、これまでの政府の対応をどう見ていますか？

◆日本の医療者はそんなにダメではないと思っています。コロナ対策を取る能力さえあれば、対応したはずです。例えば、民間病院がコロナ患者を受け入れる場合、ベッド数を半分に減らさなければいけないなどの制約が出てきます。でも、国が「手を上げて下さい」「患者さんを受け入れるトレーニングをやってください」と呼び掛け、その代わりに病院経営を全力で守るようにすれば良かったのではないかと思います。

——政府の対応は稚拙だったと？

◆医療だけでなく、さまざまな問題について臨機応変に決断し対応することが求められたと思います。しかし、昔は成功していたピラミッド型システムの限界が露呈したのではないのでしょうか。首長が国に対し「何とかして」とお願いするのではなく、自治体がかつと自由に動いて、（国は）黙って資金を出して支援するような体制の方が良かったと思います。

——日本型の決定システムでは対応が間に合わない？

◆フレデリック・ララー（ベストセラー「ティール組織」の著者）によると、組織は進化します。ピラミッド型組織では上が決断して命令しないと下は動きません。本来そのようなトップダウン方式ではなく、それぞれ自分で考えてより良い行動を取り、上がそれをサポートするようなシステムに変わるべきタイミングだったと思います。武士の特権といった江戸時代の常識が明治維新で否定されたように、今は時代の変革期で「令和維新」なんだと思います。（㊤へ続く）